

Miranda Fricker は、2007 年の著作『認識的不正義 *Epistemic Injustice*』で情報の蓄積、伝達といった認識的実践において、人が知識の主体(subject of knowledge, knower)としてもつ能力に関して被る不正について論じている。Fricker が提示した証言的不正義とは、話し手のアイデンティティについての偏見のステレオタイプによって話し手の証言の信用性が低く見積もられるという不正である。この議論は画期的であり、多くの論者にインスピレーションを与えたので、その後認識的不正義について多くの文献が生み出された。

Fricker は、話し手の証言に対して聞き手が行う信用性判断には、相手の自信のなさそうな仕草、声のトーン、態度や性格の好ましさといった言語外の情報伝達要素が関係しているが、それらによって信頼性が低く見積もられることは証言的不正義ではないとしている。しかし、表情や身振りといった非言語的な表現はそれ自体当人の感情や考えについての情報を伝えるものであり、それゆえ証言的不正義の概念が適用できると考えられる。Trip Glazer は“Epistemic Violence and Emotional Misperception” (2019)で、話し手に対する偏見や無知によって、言語による証言を受け取る以前に話し手の態度や感情についての認知が歪められることを指摘している。例えば、女性が就職の面接で力強く話したが、性差別的な偏見を持っている面接官が女性はもっと控えめであることを期待しているとする。そのことによって、女性の口調が軽蔑的で感情的であるように聞こえ、その結果面接官は女性がその職にふさわしくないと判断することが起こるかもしれない。これは証言的不正義とみなしうるのではないだろうか。

また、従来の議論では証言的不正義を被る人が言葉のやり取りができる人に限定される傾向にあったが、証言的不正義の概念を非言語的コミュニケーションにも適用することによって、不正義の被害者とみなしうる人々の範囲を拡大できるという利点がある。Lucienne Spencer は、“Epistemic Injustice in Late-Stage Dementia: A Case for Non-Verbal Testimonial Injustice” (2022)で、人が非言語的な表現—例えば頷く、首を振る、微笑む、顔をしかめる等—をしたとき、不当な偏見からそれらを単なる動作やノイズとして見なす、無視する、あるいは無意味なものとして軽視されることを「非言語的な証言的不正義 non-verbal testimonial injustice」であるとしている。特に、ジェスチャーといった非言語的表現に依拠して情報を伝達する主体は深刻な証言的不正義を被りうる。例えば、言葉を話せない認知症の人に対する、高齢者や病に対する偏見から、非言語的表現が意味のあるものとして受け取られないことが証言的不正義として挙げられうる。

本発表の目的は、証言的不正義の概念を非言語的コミュニケーションに適用することの意義と可能性を擁護することである。まず、非言語的コミュニケーションにおいて発信者の信用性が低く見積もられることによっていかなる害が生じるのかについて論じ、証言的正義の概念を適用することの重要性を示す。そして、この拡張によって生じうる理論的問題、特に「知識主体」という概念にいかなる理解(再解釈)を必要とするのか、ということについて論じる。